

## 4 世紀韓日関係に対する歴史認識の共通点と相違点

— 第1分科共同研究後記に代えて —

金 泰 植

### I.

2001年に起こった日本の中学校歴史教科書の波紋によって、2002年5月に韓日歴史共同研究委員会第1分科の委員となり、この問題に対して何らかの寄与をしなければならないという重い責任感をもって共同研究を始めて、はや2年8ヶ月が過ぎた。時間はとても早く過ぎたが、長い歴史の結果として形作られた事件は、それほど簡単に解決できないということを痛感して今日に至った。

これまで、ほぼ2ヶ月に一度ずつ両国を相互に訪問しながら開催された分科合同会議を通して、第1分科の委員はそれぞれの委員別に4回以上の部分的な研究発表を行ない、研究発表の後には該当する地域の遺跡を共同調査をしながら、古代の現場からの歴史認識を体感した。このことは両国委員の研究に良い影響を及ぼしたと考えられる。

最終原稿の主要内容は2004年6月3～5日の第5回全体合同会議兼研究発表会（於・ソウル）当時に発表されたものを補完整理したものである。ここで韓国側委員たちは広開土王陵碑文、『宋書』倭国伝、『日本書紀』等を分析して、いわゆる「任那日本府説」は成立しないと主張し、日本側委員は多くの史料の上から見るとき倭軍が韓半島南部において軍事活動を行ない、倭王権が韓半島南部支配の意志を持っていたことは史実だと主張した。このような両国委員の主張が食い違っているが、両国の主張の共通点は、倭が実際に韓半島南部または任那を軍事的に支配したことはなかったということである。

### II.

この共同研究報告書の論文の中で、4世紀の韓日関係に対する日本側の立場を明確に示すのは濱田耕策委員の「4世紀の日韓関係」である。そのなかで問題なると思われる点だけを整理すれば次のようである。

まずはじめに、本論の第1章において、七支刀は372年に百済の王世子が水平関係の外交によって倭王に送ったものであり、これは百済がその年に東晋の外臣となった国際関係を背景として、そのライン上に倭国を参入させるものとした。そして、百済王は東晋皇帝が369年に造り372年に自らに与えられた七支刀を倭王とも共有するため、その年にすぐこれを仿製して送ったが、東晋の七支刀には表面にだけ文字が彫られてあり、百済はこれをそのままに模倣した別の七支刀を造り、新たに裏面にも文字を彫って倭に送ったというのである。その根拠として現存する七支刀の表面と裏面に共通して入っている文字「造」「百」「刀」「王」の字形の違いが大きく、時差があったという山尾幸久の説を支持した。

しかし、該当の文字は若干の字形の違いがあっても、画を引く意図に大きな違いはなく、表面に2回現れる「百」字の場合にも、2つの文字の間に若干の形態の違いがある。それゆえ、これらはすべて同時に書いた文字であり、堅固な鉄剣の表面に文字を刻む過程で字形に若干の違いが出たに過ぎないと見るほかない。その上、仮に百済の七支刀が東晋から受けた七支刀を模倣して造ったものだとすれば、百済が新たに入れたという文句になぜ「先世以来未有此刀」、即ち「以前にはこのような刀はなかった」という内容が入るのか説明できない。372年に百済王が中国から冊封を受けて七支刀を受けるや、すぐ

さまその年に全く同じ刀を作り、その裏面に嘘まで刻みこんで倭王に送ったとしか説明できないならば、その解釈には無理があるのである。

第二に、本論の第2章では広開土王陵碑文を通して、391年から404年まで倭軍は百済と連携し、韓半島南部の新羅地域から中部の帯方界まで出沒して高句麗と戦い、これによって高句麗は「事実とは異なり」倭が百済と新羅を臣民としたと認識したものと理解した。ここで、倭軍が百済を臣民とする支配関係では決してなく、むしろ百済が主導して倭と加耶諸国が協調した三者の連携であったと捉えている点は正確だと思われる。しかし、碑文に現れる記録のみを見ても百済は倭と「和通」した状態であり、新羅は倭人の攻撃を受ける状態であったため、高句麗がこれらを同一の用語である「臣民」と認識、または誇張したということは理解しにくい。これはやはり、いくつかの文字が見えない辛卯年記事を無理に推定して解釈した結果であると考えられる。

第三に、付論第1章で4世紀以前の紀元前2世紀の漢の4郡の設置から紀元後3世紀までのことを論文1編の分量で扱うが、この部分は今回の共同研究の範囲から外れるもので、韓国側では扱っていない。その論文において“魏から「邑君」「邑長」の印綬を賜った韓族社会の氏族長たる「臣智」層が既に魏に臣従しており、その立場から倭国使を帯方郡や洛陽に嚮導する働きがあった”と見ていることは、三韓の臣智の主観と能力を過小評価し、当時の国際情勢を日本本位に捉えたものである。

また、古朝鮮が中国と真番との通交を妨害するや漢の武帝が怒ったというのは、「真番」ではなく「真番旁辰国（または衆国）」との通交を妨害したということについての誤りではないかと思う。韓半島北部全体と南部に及ぶ土地が郡県統治を受けたと記述しているのは、真番郡が南韓にあったという仮説を認めているように思われるが、これは学界において有力な説ではないため、大掛かりな解明を必要とする。

全体的に見てこの論文の最も大きな問題点は、4世紀の韓日関係を論じながらその当時の日本列島の状態についてはほとんど説明をしないまま、倭国はあたかも一つの中央政府によって倭国全体の利益のために活動していたように想定したことにある。このことはもちろん、当時の日本列島の状況を伝える文献史料である『日本書紀』が不正確であり、そのまま利用できないという限界のために現れた結果である。しかし、4世紀の韓国と日本の「関係」を論じようとするならば、まず優先して両国の内部の状況、両国の文化的な能力などを比較するべきであろう。4世紀当時の日本列島が政治的に、外交的に一つであったように説明するのは無理があり、生産能力と戦争能力、社会組織などのような文化的な能力の面において、倭国が韓半島の各国より優れていたように説明するのも納得しがたい。

### III.

第1分科はこのような研究結果について、座談会を通して再び両国の立場を整理しようとした。4世紀と5世紀についての座談会は先に2004年6月12日の第16回会議（韓国・江陵市）の折に行われ、第17回会議（日本・松江市）でその録音原稿を交換した。6世紀と将来の展望についての座談会は2004年10月30日の第18回会議（韓国・晋州市）で再開し、2004年12月19日の第19回会議（日本・対馬市）でその録音原稿を交換した。

4世紀に関する座談会において、筆者が4世紀の韓日関係史の研究を前進させ、相互認識上の共通点と相違点を確認するために提起した問題は、①『日本書紀』神功紀49年条の7国平定記事の理解、②広開土王陵碑文所載の倭軍の性格、③4世紀の韓日関係の基本性格の3つであった。

実際の座談会で両側の委員たちは（1）『日本書紀』神功紀49年条の記事は8世紀の日本人たちの認

識に過ぎず、(2) 近年では神功紀 49 年条記事をそのまま史実と信ずる研究者は韓日間にほとんどおらず、(3) 広開土王陵碑の倭軍は高句麗に対抗したと記録されていることは事実という点を共通して確認した。しかし、その相違点は (1) 神功紀 49 年条 7 国平定記事は史実でない (韓国側) のか、または史実なのかどうかまだ分からない (日本側) ということと、(2) 広開土王陵碑の倭軍は高句麗と戦った百済の援軍にしか過ぎない (韓国側) のか、または高句麗の南下に対する倭の危機意識による派遣軍 (日本側) なのかということである。

座談会第 1 部を通して確認できたことは、韓国側委員は多くの問題の史料の無効性を主張したのに対し、日本側委員はそれらは史料の制作者である日本側と高句麗側の当時のまたは後代の認識に過ぎないが、史実かどうかは確定できないという主張をした点である。特に神功紀 49 年条の記事に対する議論と、それに基づいた一部の概説書や教科書の叙述が問題となって、長い時間議論をしたが、相互の間で共感したことは次のようである。

すなわち、『日本書紀』神功紀 49 年条に基づいて成立した末松保和の任那日本府説は、これまでしばらくの間通説の地位にあったが、今日の韓国と日本の学界の研究者の間では、この学説はほとんど認められていないということである。しかし、この代案となるべき 4 世紀の韓日関係を見る視角は、多くの側面で食い違い、通説といえるほどの説がないために、一部の概説書や教科書に既存の歴史認識が残存しているに過ぎないということである。

このような問題について議論をしたが、時間が不足して、結局 4 世紀の韓日関係の基本の性格をどのように見るべきかについての論議はなされなかった。この問題で最も重要なことは「加耶史とその周辺の状況をどのように理解するか」である。考古学的遺物の出土状況から見ると、4 世紀後半に、韓半島南部の加耶諸国の盟主国である金海の加耶国と日本の畿内地域の新興の河内勢力は鉄素材を媒介に緊密に交易した。その鉄素材の生産と流通の主体はもちろん加耶であった。

座談会の第 2 部では、6 世紀の韓日関係史と今後の古代韓日関係史のための両国共同研究の方向について展望した。その過程で今日では倭の南韓経営論のようなことを信ずる人はほとんどいないということが再び確認された。また、日本の国内の至る所にある神社などの遺跡案内板に「神功皇后の三韓征伐」のような用語が書かれていることは問題であるが、日本ではこれを神話的なものと考えており、また一部の案内文にはこれを「韓半島との文化交流の結果」と修正したものもあるという点は一部であるが望ましい変化だと考えられる。

少なくとも加耶地域の考古学的成果によれば、加耶地域を日本が長い間占領した、あるいは支配したという証拠は全く現れていない。遺物から見ると、加耶は厳然と百済、新羅、倭などと区分される独立的な文化圏を長い間維持していた。事実、4 世紀の東アジアは中国の分裂とともに多元的な形に再編され、韓半島ではこれを高句麗と百済がまず積極的に利用できる能力を備えており、一方で新羅、加耶、倭はそれなりの政治的独立性を持ってはいても、それに付随的に連動して動いたという点を理解しなければならぬだろうと思う。

#### IV.

おわりに第 1 分科韓国側幹事として次期委員会の必要性を提起しようと思う。第 1 分科で対象とする古代韓日関係史の場合、少なくとも紀元前 5 世紀頃から紀元後 10 世紀頃までの期間を扱うべきだが、できるものから漸進的に研究するという観点から、今回の委員会では最も緊要な 4～6 世紀の韓日関係

史のみを共同研究するにとどまったからである。

そして、古代韓日関係史に関連する争点の中で、日本の農耕および金属文化の起源問題、日本列島に移住した古代韓国人（いわゆる、「渡来人」）の文化伝授の問題、古代の中華秩序と朝貢に対する偏見、唐の登場と関連した東アジアの情勢の変化、律令国家としての新羅の位置、渤海と日本との関係、日本の天平文化と新羅との関連性などの問題が全く扱われなかった。そして4～6世紀の任那日本府問題についても、その現場である加耶の状況と関連して、より深く、詳細な論議が必要である。そして、このような論議の中から韓国史も日本史もともに一段と前進することを期待する。